

# 社会福祉方法技術の理論化 (その1)

構造主義的アプローチ

中 村 永 司

## 第一章 構造主義の科学的方法の意味

### 第一節 構造主義の原理

- (1) 全体性の原理
- (2) 変換性の原理
- (3) 自己制御の原理

### 第二節 全体と部分

## 第二章 構造主義と社会福祉の接点

### 第一節 全体性の原理における相互作用概念の意義

### 第二節 全体性の原理における体系の概念

## 第三章 社会福祉における社会関係

### 第一節 役割概念

### 第二節 社会福祉における関係論

最近社会福祉方法論統合化の機運が、関係学会ならびに専門学誌にとりあげられ、高められてきているが、その

社会福祉方法技術の理論化(その1)

理由は既成の諸方法—social case work, social group work, community organization—が「対象者のニードよりも、自分（ソーシャルワーカー）の専門とする方法によって問題を定め、その問題解決に適する対象者だけを援助するという欠陥」<sup>①</sup>による援助の断片化及び専門的近視眼の永続化による弊害が指摘され、有効性をもちえなくなつたからである。すなわち社会福祉方法の実践形態として共通の基盤をもちながら、その歴史的発展過程や対象となる人の数を異にしていたため、そこでとりあげられる目的や概念、知識や技術を見失ってしまった観がある。

しかしこの統合化の過程においてセパレートされた伝統的な方法論がもつ適切な知識「実践に共通なまたは統合的な方法論がもつ適切な知識の実態」「ケースワーク・グループワーク・コミュニティオーガニゼーションが作り上げていた境界線を裁断し、それらの知識が方法論の統合に共通性があること」<sup>②</sup>を基盤にして、さらにその概念枠や理論の構築をすすめるために、再び既成の方法、技術を見なおし今後の発展に資することも期待されよう。

本論はこのような既成の方法論のもつ知識や技術の限界性、共有性を理解し、現代統合化論のもっとも主要な理論的地位を占めているシステム論を参照しつつ構造主義（Le Structuralisme）の概念を導入して方法論再考を試みるものである。このことは社会福祉が他の学識領域からみさかいてもなく理論を借りてくることのそしりはまぬがれないが、社会福祉が実践科学たる有効性と実用性をもちうるためには、行動科学や社会科学のもつ概念や知識の上にさらに新しい知識が加えられ、重積される以外には考えられない。

構造主義のもつ科学的方法の導入の意図は(1)社会福祉の視点を再確認し、(2)さらに人間と状況との相互依存関係における成長への行動及び態度の変容のメカニズムを追求し、(3)ソーシャルワークの技術と構造主義の接点を「適応」に焦点をあててとらえなおし、(4)構造主義とシステム論の比較検討を試みてみる。しかし本論においては紙数の制限もあり、(1)を重点にして展開をなし、(2)(3)(4)は別誌にゆずりたい。

## 第一章 構造主義の科学的方法の意味

構造主義における「構造」とは、いかなる意味をもち、いかなる働きを有しているか。社会福祉が構造主義的方法を採用したならばいかなる点にその可能性が存在するか。学門体系としてその形成過程も背景も異なった構造主義理論を、社会福祉の理論に適用しようとする試みは、ある程度の困難が予想されるであろう。しかし構造主義の原理を社会福祉の理論に適用することにより、いくつかの新しい可能性と分野の開拓が期待される。すなわち構造主義の原理の中に社会福祉方法論の本質や視点を明らかにする素材を含み、社会福祉方法論の有効性と固有性とを明確にする、さらに構造主義が対象でなく方法論追求の理論であるところに本論の展開主旨と一致する。

ソーシャルワークの方法論的使命は、科学的でより実践に富むためのものをさぐり、体系化を志向するものでなければならぬが、ソーシャルワークの永年のジレンマは、ソーシャルワークの処遇効果に対する客観性の欠如及び実証性の限界によって特色づけられている。他の人文科学や社会科学が実験や調査、測定による自然科学的方法を採用することによって、相当の実績を上げているのに比べて未だ一部ミラクルな要素が残っているのは、ソーシャルワークの対象のもつ特質が実験主義的方法の採用を許さず、数量化することによって人間存在の本質や主体性、尊厳性を損うおそれを生じさせるからである。そのようなソーシャルワークのもつ限界性を克服するものとして、全体的かつ包括的な理解を促すものが構造主義の理論である。構造主義の導入はソーシャルワークの客観性と実証性を獲得するための試論となろう。

### 第一節 構造主義の原理

構造主義を特徴づけるものはない。構造主義は方法の理論であるため、その特徴は対象にあるのではなく、方法に求められる。それでは構造主義的方法とはいかなるものであり、いかなる原理を有しているか。これに答える前に「構造」のもつ特徴について、J・ピアジェ (Jean Piaget) の著書「構造主義」を要約する。

### 1、全体性の原理

構造は「要素から成るが要素は、体系そのものを特徴づけている法則に従っている。そしてこの合成と呼ばれる法則は、累積的な場合には帰せられないのであって、要素の特性とは区別される集合の特性を、全体そのものに付与している」<sup>③</sup>ものである。すなわち構造は単なる要素の固りではなく、また要素はみさかきもなくならんでいるものでもない。一定の秩序と関連性の中にある。また関係体としての構造のもつ特質は要素でもなければ全体でもなく「要素間の関係、つまり合成の仕方ないし過程」<sup>④</sup>である。構造は要素の単なる集りではなく、全体との密接な関係のもとで要素のはたらき、変化、結合の仕方など全体性の原理をその中に含んでいる。

### 2、変換性の原理

全体性是一種の関係体としてとらえられ、合成の過程として把握されるが、その全体性は構造化する性質をもつ。すなわち構造は「形成」を含んでおり、「構造化」の過程である。

この「構造化」ないし「形成」が、「動き」から「成長」への仲介原理となる。「基本的な数学的〈群〉から、親族関係を支配する構造などにいたるまで、すべての既知の構造は変換体系である。……この体系が変換をふくんでいないのならば、それは何らかの静的な形態と混合し、説明的配慮をすべて失うことになる」<sup>⑤</sup>と構造のもつ変換の特質を強調している。

### 3、自己制御

構造は「変換」をとげ続けるものであるが、無制限なものではなく、一定の枠の中での変換である。つまり、構造主義の変換は、「その境界の外側にみちびくのではなくて、常に構造に属し、かつその法則を保存する要素だけを生じさせる」<sup>⑥</sup>ものである。常に新しい要素を形成しつつ、自己制御により境界の安定を保ち、保存性を有している。

以上のごとく、構造には三つの基本原理を含んでおり、これらの原理に一貫して流れているものは全体と部分との関係である。全体と部分との相互交渉の過程が変換の原理を導き、変換過程の結果が自己保存として一定の枠を形成する。さらにこの理論を考察すれば三つの基本原理の外に、構造化原理が内在されていることがわかる。

#### 4 構造化原理

構造の変化や発達を規定する本質的な要因は「均衡」である。個体は外界に対して開かれた体制であり、外界から影響されるばかりでなく、逆に働きかける存在である。この個体と外界との相互交渉を通じて、新しいものを形成していく。一定の構造が外界と受動的、能動的に関係をもつことにより、安定性を崩し、一時的に均衡を失うことになる。しかし、構造は均衡を崩した外界の刺激を内包することによって、更に大きく安定性の高い新しい均衡を回復させる。すなわちそこに均衡—不均衡—再均衡という変換、成長の原理が展開されている。それは弁証法的な正—反—合という対立したものとしての「反」ではなく、一つの新しい要素としての刺激を受けることにより、構造は一時的な不均衡を生じるが、その新しい要素を含んで再均衡がなされるのである。この再均衡が構造化の基本となっているものである。

構造は一つの均衡状態を意味する。この均衡状態に内的、外的な圧力が加えられると均衡を維持しえず、均衡の破壊が生じる。もとの構造はこの不均衡な状態から、均衡状態に回復するための自動運動を行い、再びもとの均衡

状態に再帰する。この一連の変化が再均衡化である。均衡には次の三つの形態がある。(1)全体の優位の下に部分の変形によって均衡が保たれる場合。(2)部分の優位の下に全体が変形して均衡が保たれている場合。(3)全体と部分とが相互に保存されつつ均衡が保たれている場合<sup>⑦</sup>の三つの均衡の内、(3)の均衡がもっとも安定した均衡であると思われる。そして(1)や(2)の安定性は構造がどんな障害を克服しなければならぬかによって左右される。

従って「均衡化」は一つのサイクルであり過程である。それも活動の停止状態でなく、変化する力動的な過程である。

## 第二節 全体と部分

この全体と部分との関係は、例えばマクロ次元においては社会集団や家族集団と個人との関係構造があり、ミクロ次元においては人格構造、ことに自己維持のために機能する自我構造がそれに対応する。

人の行動は社会と個人との関係において成立するが、その成立要件として重要な仲介概念が「役割概念」である。現代社会は高度に細分化された役割の総合体であるとされる。つまり、社会構造は「明細化された役割分化の総体」<sup>⑧</sup>であると言われ、社会構造はこれを構成している個々人の行動ときりはなしては考えられない。つまり「個々人の行動は、一見したところきわめて多様であり、またバラバラなものである。しかしながら、社会的（相互作用の）場面においては、それが決してバラバラなものではなく、ある側面からみると一定の斉一性のあるパターンをもつようになっている」といわれ、社会（全体）と個人（部分）とは不可分の関係にあって、部分は全体に依存し、全体は部分に浸透している。全体と部分との関係を家族構造に視点をあてて考察してみる。

家族が全体的な性格をもつということは「全体的 (holistic)」とは、家族が個人及び社会と構造——機能的に関連

したシステムであると理解することを意味する。システムは相対的な概念である。家族はより大なる社会的システムの下位システムをなすと同時にそれ自体、一つの社会的システムとして下位システムからなっている<sup>⑩</sup>と家族をシステムとして把握される。そしてシステムは家族（全体）と家族成員（部分）との、あるいは家族成員間―夫婦間、親子間、同胞間―における相互作用システム（interactive system）として規定され、このシステムは必然的に構造をもつものであるとされ「個体が要素からなり、それらの諸要素間になんらかの程度において恒常的な機能的連関がある場合」<sup>⑪</sup>において構造は成立すると考えられている。

ソーシャルワークの専門家においても、この全体と部分との関係を「人（部分）と状況（全体）との相互作用」でソーシャルワーク状況をとらえたものにホルリス（F. Hollis）がいる。彼女によるとソーシャルワークの中心概念は「状況の中にある人間」<sup>⑫</sup>（the-person-in-his-situation）であるとし、状況把握の視点を「全体性」（gestalt）にしている。パールマン（Helen. H. Parman）は人間の行動を全体との関連において次のように論述している。「人々に関連するわれわれの自己表現は、いきあたりばったりとか、衝動的な行き方では起らないし、また全く自然には起らない。他の人々や社会的状況に対するわれわれの関係は、ある型のある行き方の中にある。われわれ個人の伝達のあり方は、大部分期待された行動の全体にわたって社会的に決められ、統一されたあるパターンの中に入れられパターンによって色づけられそして形づくられる」<sup>⑬</sup>このように個人の行動は個人によってなされるものであるが、個人独自でなされるものではない。全体の構造的機能が部分の中に浸透して、一定の行動を触発する。行動は全体と部分との有機的な関連の中でとらえられるものである。ソーシャルワークの接近方法は分析的視角をもって、科学的確実性を得ようとする方法（例えば心理学的接近法）よりも、全体的かつ概括的な方法を用いて理解する方がより大きな成果が期待される。なぜならソーシャルワークが対象とする人間の行動は、生活諸領域における

「生きた出来事」(living event)<sup>14</sup>であり、常に動的な問題を有しているからである。この全体性の観点を強調してアプテッカー (Herbert, H. Aptekar) はソーシャルワーカーにとって「細い行動の分析はあまり価値のあることではなくて、むしろその大まかな側面を理解するほうがよいという事である」<sup>15</sup>と述べ、さらに全体の形態において人間の行動を研究する場合は、実際に目的全体にわたってより大きな価値をもつものをつけ加えている。普通人がソーシャルワークサービスを受けようとする場合、彼のもつ問題は生活状況のごく限られた一面を強調してくる。例えば、生活資金の欠如や病氣、子供の非行、夫の乱行、姑の無理解などの生活の特定領域の問題として、ワーカーに援助を依頼してくるものである。対象者は自己の問題を理由の明らかな部分的な問題として考え、そのことにみにサービスを受けようとするがソーシャルワーカーの焦点は、対象者の生活に支障のある部分に注意をそそぎながら、対象者のもつ部分的な問題が、彼の生活諸領域にどうかかわっていくか、つまりソーシャルワークの多くの事例にみられるごとく、生活上の部分としての当面の問題をあつかいながら、真の問題は家族の全体構造の中にあることを洞察するのである。別のみかたからすれば全体構造が部分としての問題を発現させているともいえるのである。例えば子供のもつ異常行動はその原因を子供自身に問題があるものとししないで、子供と両親、兄弟との関係、子供と教師との関係、あるいは地域関係にと問題認識視点を拡大し、そこでの期待とか、回りからの要請などをさぐって問題行動との関連を究明していく。つまりアプテッカーも指摘するように「クライアントの生活の中で、その時彼をもっとも強く悩ましている部分から出発する反面、全体的な人間が常にとの部分と関連して活動しているかという事実を無視したりしない、だが、ワーカー自身はこの部分に関与するのであり、クライアントがこの部分との関連で行動することがすべてに関与する。しかしクライアントは全体的な人間であって、ケースワーカーは、クライアントをそのように理解」<sup>16</sup>しなければならない。対象者のもつ問題解決への端緒は部分にあるが、部



分は全体との関連において新しい視野を形成し、より全体的な問題の発見にわれわれを導いていくのである。この全体と部分の関係をさらに立体的な観点から把握したのが次の4点である。

- (1) 全体の全体自体に対する働き（保存）
- (2) すべての部分のはたらき（変形または保存）
- (3) 部分の部分に対するはたらき（保存）
- (4) 部分の全体に対するはたらき（変形または保存）<sup>(17)</sup>

これらの4つの活動形態は、自動運動をなしながら全体構造の中で相互にバランスを保ちつつ、構造を維持しているのである。これら4つの活動は、全体と部分との関係における構造の内部運動であるとされる。

全体と部分との関係はさらに両者の依存関係、浸透、相互補足性、交換などの種々の関係様態をもって維持されていることがわかる。このように全体性の視野における人間行動の展開理論は、あらゆる人間事象を対象領域とする福祉において、非常に有益なみかたを提供してくれる。実際この全体論的接近が構造主義と福祉を結合させる要素となっており、構造主義は全体的特性と関係的特性によって福祉の対象領域と密着するのである。次章においてこの関係をもう少し詳細に検討してみることにする。

## 第二章 構造主義と社会福祉の接点

構造主義の特色は、関係概念の採用に一義的な特徴を見出したことにある。全体は「要素間の関係つまり合成の仕方ないし、過程である」とされる。つまり、全体は「この関係または合成から由来する」ものである。またその

全性質は、要素の単なる累積的な連合ではなく、「要素の特性とは區別される集合の特性を、全体そのものに付与している」<sup>18)</sup>ところにある。

さて、構造主義と福祉の接点を論及するにあたり、この構造主義の全体性の原理の特色を大きく二つに類別して考察してみる。

その一つは関係様態である。つまり全体を構成する要素と要素との関係であり、要素と全体との関係である。他の一つは全体そのものが要素の特性を規定するが、必ずしも全体の性質は要素の特性と一致しない。

この章での主要な関心は、以上の二つの特色が福祉の全体性の原理といかにかかわっているかというところにある。

第二の特色は第一の特色を前提として、おのずからそれに導かれてゆくものであるため、一方を重視して、他方をその附加物とみるべきものではない。なぜならこの二つの特色は、構造的特質の要素となると同時に、福祉の原理の接点になるものであるからである。つまりこの二つの特色は表裏一体の概念として把握されなければならないものである。つまり両者は一種の継続体的なものである。

第一の特色をみたとす説明概念として「相互作用」論を導き入れる。そして第二の特色を解説するものとして「相互作用」のパターン化された「体系」の問題を扱うことにする。

### 第一節 全体性の原理における相互作用概念の意義

人が社会生活を営む上において、なんらかの形で他の人や物に依存し、規定されながら生活を維持していることは自明である。

人的物的世界において、人が交わるための基本的な形態は「相互作用」である。本節において相互作用概念を起用した意図は、前節の全体性の第一特色たる「関係様態」の理解のためばかりでなく、構造主義と福祉が「関係様態」によって共通の次元で結ばれ、その「関係様態」そのものが両者の共属財産になって、両者を不可分にするものとみなされるからである。すなわち、構造主義も福祉も、その全体性の原理において、全体であれ部分であれ、「関係」を問題にするのである。また、この「関係様態」は構造主義と福祉の原理の特色からみて、相互作用関係に限られる。なぜなら、全体及び部分の関係は「相互性」によって構成されるからでありそのため二者間に一方向的な関係は成立しないのである。存在したとしてもそれは有機的な世界においては存在しない。つまり、社会的場面の構造には他者の存在があり、その他者が客体的な場面の構成をなしている。社会的場面の最も簡単な型である相互作用の分析上のモデルは「ダイアディクモデル」<sup>⑭</sup>(*diadic model*)である。「ダイアド」とは、自我と他者という二人の場面を意味している。

相互作用の過程は「人Aが人Bに対してはたらきかけた行動が、Bにとって反応をうみだす cue (手がかり)の役目をし、これによって、こんどはBがAへはたらきかけをおこなう」という一連の過程をもって展開すると言える。つまりこの相互作用過程を要約すれば次のごとく要約できる。

(1)相互の認知、(2)相互の期待、(3)相手が自己に対してもつ期待の相互的予測、(4)相手の行動の変化に応じる相互反応の4点である。すなわち、相互作用場面における自我と他者との関係は、フィード・バックの過程である。

構造主義の関係概念を全体と個、個と個の関係で論じるにあたって、より幅広く、深く理解するために相互作用説の代表的な学説 G・ジムメル (G. Simmel)・C・H・クーリー (C.H. Coley) G・H・ミード (G. H. mead) の相互作用説について概観する。

G・ジムメルは物理的空間における表象的世界における「相互作用」、つまり「心的相互作用」を關係概念の中心核においた。彼は「社会的統一は他の統一と同様にその要素相互間に緊密な相互作用——この場合は心的相互作用——があることによって統一であり、社会とは、個々人の間の心的相互作用の關係に他ならない」と言っている<sup>24</sup>。彼は社会の本体を究明する場合の説明概念として「心的相互作用」に着想を求めたのである。

あらかじめことわっておかねばならないことは、本節で問題になっているのは、彼の着想した「心的相互作用」の關係様態であつて、社会そのものではない。いうなれば、「心的相互作用」概念の關係モデルであつて、二者間の關係たるひな型としてあげる。彼は心的相互作用を「社会化の型式」としてとらえ、肯定的な關係や対立的な關係を含めて、人間間の心理的な關係様式であると規定していることにある。

ジムメルの「心的相互作用」は心的なるが故に、表象世界における思惟形式であつて、體驗構造としての論理分析でなかつたために、早晩に克服されなければならない運命にあつた。しかしジムメルの貢獻は、社会及び個々人の間に「相互作用」の概念を起用し、相互作用の形式を通じて社会化の肯定的、積極的側面を志向していることにある。

さて、ジムメルの心的相互作用概念の有する觀念的、思惟的な「我と汝」關係を自然的空間としての物理的關係としてではなく、體驗關係として「我と汝」をとらえようとしたものに、ジムメルと同世代のC・H・クーリー(C. H. coley)とG・H・ミード(G. H. Meed)の理論がある。

かれらはジムメルとは別に「ジムメルの関心と比較的接近する問題を、しかもジムメルに欠けていた自我形成の観点からあつたついている。ミードにおける「He」の概念、クーリーにおける「鏡にうつった自我」<sup>25</sup>の概念」がそれぞれである。

クーリーは「象徴的相互作用説に立って、第一次集団内の相互作用を通じて、社会的自我が獲得せられる」という基本的な方式を提示した。またミードは「クーリーの〈マインド・自我・社会〉の概念を社会的行動主義の観点から再規定」し、自我の発展に役割取得の概念を用いて、相互作用の概念図式を前進せしめた。<sup>24)</sup>

さて、クーリーは社会及び個人の本質的な事実を理解する方法として、想像の中で研究しなければならないとしている。すなわち、彼の思考の特徴は「人の自分自身についての意識は、他の人が自分に対してもつ諸観念の直接反映である。他人は自分の想像の内であり、想像においてのみ他の人々は自分に影響を及ぼす。そして自分もまた他の人の想像のうちにおいてのみ、彼らに影響を与える」と<sup>25)</sup>いって、彼は自我对他者の関係を想像所産として重要視している。ゆえに、彼の社会的自我の概念を「looking glass self」という表現によって、自我の発展の相互作用的な側面を強調したのである。彼の論述した相互作用理論は、意識上の相互依存関係としてとらえられ、また彼が強調した点は、諸国人のマインドにおけるコミュニケーションの過程であると理解される。クーリーの内省的な自我の観念を発展させて、もっと経験に近い概念を提供したものに、G・H・ミートがいる。彼によると言葉の象徴的な意味を介して、自分自身が話し手と聞き手の二重の機能を果していることを強調し、「相手の役割を取得することにより、他人の反応型式を予想するものとした。このような役割取得の概念を適用することによって、自我を「Iとme」の二つの側面より把握している。<sup>26)</sup>「me」の二つの側面は「一般化された他者の形において本質的にはパーソナリティの恒久的部分となっている社会内の他人の態度から来るもの」である。また「I」は「社会の態度に対するその人の反応よりなる」ものである。すなわち、「自分自身を他者の目を通してながめ、自分に対する他者の態度の組織化されたセットをみずから内にとり入れたとき、そこに成立するのがmeであり…Iは他者の態度に対する主体的な反応そのものである」<sup>28)</sup>このようにミードは自己の内部におけるダイナミックな矛盾関係に大

いなる関心をよせ、そこに人間形成の発展的契機を見出しているのである。

以上、学説史的にジムメル・クーリー、ミードの相互関係をやゝ詳細にながめてきた。その理由は、前述したように構造主義と福祉の接点が「関係様態」にあること、その「関係様態」は相互作用の概念以外に考えられないためである。それと同時に考慮されることは、相互作用のもつ意義である。ジムメルの観念的な心的相互作用説にしても、クーリーやミードの想像や言葉による象徴的過程に重視した象徴的相互作用説にしても、それらの論述の中に見出されるものは、自我と他者とのダイナミックな矛盾緊張関係によって生み出される創造的な人間形成の過程である。

クーリーやミードの理論に対する批判は別にしても、この二人の象徴的相互作用論者が果した意義は、個人の成長発達の志向性にある。相互作用の場にある個人と他者とは相互に制約し合い、他人の存在、あるいは行動が刺激となつて、個人が影響を受け、フィードバックによつて他者に影響を与える。この自体の相互影響作用を通じて、個人は変化していくのである。個人と社会ないし個人と個人との関係は「他者から交互的 (reciprocal) な、あるいは、周期的な (Cyclical) なものであつて、相互作用 (interactional) 、あるいは交互作用的 (reciprocal) というより相互影響作用的 (transactional) というべきもの」である。<sup>②</sup>

そして、この相互影響作用の積極的な意味は、個人の社会的行動が、彼を社会的に形成すると考えられているところにある。つまり相互作用において個人が「他者の役割を取る」(taking the role of the other) ということ、つまり他者と同化し、かつこれを内面化することによつて自己のパーソナリティを成熟させ発展させる。すなわち「我と汝」「自我と他我」「Iとme」の二者関係がいかなる名称で呼ばれようとも、この二者矛盾関係の中に、人間の発展と形成に対する重要な意味が包含されている。

相互作用論において、不可欠の重要な概念となるものは「役割」であり、特に相互作用において、相互作用の果す貢献や機能という観点からみる場合には、「役割」は非常に重要な概念となっている。「役割」は相互作用の基体であり、役割の形式を通じて、「社会化」と呼ばれる成長への契機を造成し、そして社会関係の根本基底をつかさどっているものと了解されよう。

役割についての意味ないし、定義については次章において詳述しておいたのでその項で改めて検討する。

かくして構造主義と福祉の接点が「全体性の原理」によって導かれ、「全体性の原理」は関係概念により把握された。構造主義と福祉は両者の共通概念たる「関係」そのものに独特の意義を付与しているのである。

本節において、構造主義の関係様態の抽象的なレベルから、より経験的、具体的レベルに移行させられるものとして、「相互作用」概念が求められ、「役割」を動員させたのである。これらの背景には「構造主義の原理」における「変換性の原理」が含まれ、役割相互作用において個人に期待される「形成」「成長」への動的要素を暗々裡に含めている。

次に「相互作用」に導びかれた「役割」の「体系的」特色について解説する。このことは構造主義の原理における自己制御の原理」と関係している。

## 第二節 全体性の原理における体系の意義

さて「役割」は、自他の関係を含んだ相補的關係——夫の役割は妻の役割と、母親の役割は子供の役割と相補的な関係にある——にあって相互に規定し合っているものである。一方の役割は他方の役割から、ある程度必然性をもって決定される。すなわち一方の役割は他方の役割との関係において要求され期待されるものである。個人は相互作

用体系からの要求や期待を意識しない場合もある。つまり「ある役割がシステムから要求され、期待されたいことは、本来次元の違う問題である」<sup>⑩</sup>とされる。つまり相互作用の体系が要求するのと、相互作用の一方の個人が相手の役割を要求し、期待するのは、質的な相違があるのである。定義の上から端的に言えば、「自己保存的 (self-maintaining) なものであり、そのためには内部の課題がバラバラというより、一貫した形で果される」<sup>⑪</sup>もの、そして自己保存とは「内容を変えながら弾力的に内部要因を調整しながら体系独自の運動をつづけてゆく」<sup>⑫</sup>もの、つまり体系は体系自体を維持するために閉鎖的である。そのためには体系の成素は体系存続のために働き、体系そのものも自己存続のため一定の枠を要求する。これが限界維持の要請である。言うなれば構造主義の原理における「自己制御の原理」に一致するものである。さらに体系は諸構成要素が相互依存しながら、一貫して持続する自己維持のために、絶え間なき均衡の連続過程にある。従って体系はそれ自身、自己維持ないし限界維持に働く一定の自律的運動法則と閉鎖的特質を有していることから、体系自体が個人に要求する役割期待と特定個人から受ける役割期待とは明らかに相違する。この自己維持と限界維持の機能が体系にとって必須の条件であり、個人的諸欲求を優先させる場合も考えられる。次に体系のもつ機能という面を摘出してみると、機能の概念は非常に多義的であるが大きく分けて次の二つの意味に整理される。それは(1)体系自体の活動であり、(2)体系の存続に対して寄与するという意味とである。<sup>⑬</sup>

体系はこの二つの意味を含めた機能によって支えられているが、これは体系それ自体としての運動としてみられる場合と同時に体系（全体）に対する部分の寄与という二側面の働きとして理解される。例えば家族は役割による相互作用の体系として理解され、役割の補足性 (Complement) の上になり立つものである。もし補足が阻まれるならば体系としての均衡状態が崩れる。つまり補足性の阻害は破壊であり、家族の体系としての存続が困難になる。



そこで外部の刺激により均衡が崩れたならば、補足性を回復し、もとの相互的均衡状態に再帰する。この体系自体のもつ運動過程、均衡―不均衡―再均衡過程を想定し、この体系維持のために働く部分たる家族成員に対して補足性の阻害の原因及び補足性の回復要因を明らかにしたのがスピーゲル (John, P. Spiegel) である。またウィーン (Wynne) も家族体系の維持のための部分たる家族成員の潜在的な役割取得の意義について述べ、ニューローティックな均衡維持機能を擬相互性 (pseudomutuality) に求めしめる。<sup>34)</sup>

すなわち、問題は役割相互間の関係における補足性を損わせているものが何であり、どうすればそれが回復できるか。そしてそれが全体にいかにからんでいるかというところにある。また、問題の有する部分たる個人が家族全体に対していかなる存在価値を有しているのか。彼は魂のぬけた人形としての役割をになっているのか、あるいは、スケープゴート (scapegoat) として存在しているのか、このような問題は体系維持の要素たる個人 (体系を構成する部分) の寄与と体系自体の維持運動、均衡―不均衡連続過程を通じ、全体と部分の一つの体系的な相互性の中でとらえられる。このことは対象認識の視点が全体でも部分でもなく、部分と部分との関係、全体と部分との関係の仕方に焦点をしばり、福祉の視座をこの関係様態に定着させるゆえんがある。ここにゲシュタルト心理学者、マッタイ (R. Mathai) の論述が想起される「一つのゲシュタルトの構造関連において全体とその部分との相互に規定し合っている。すなわち、部分は全体の内に非独立的に (依存的に) 結合されている。しかし部分は全体にその分節部分を刻印づけている」と。<sup>35)</sup>

以上、全体―部分関係と規定づける「相互作用」と「体系」のもつ福祉と構造主義的特徴について述べてきた。

### 第三章 福祉の対象としての社会関係

福祉の援助の特質は生活の次元に定着したものでなければならぬ。人間の社会生活を支える基本的な原理は生活を営む上に必要な社会諸制度との有機的な関連及び操作の方法にあるが、人間の本来に有する基本的欲求に対する社会諸制度の対応関係をもって社会生活を特色づける。人間の社会生活は岡村重夫氏によると「生活する主体としての人間と、生活客体としての生活環境の相互関係体系である」とされ厳密には「七つの社会生活の基本的欲求を充足するために、それぞれ固有の機能をもち、かつそれに対応するところの多数の社会制度と効果的に結びつくということにはかならない」と規定されている。そして「結びつき」とか「相互関連」といわれるものを「社会関係」という用語に置き換えられ、その用語のもつ重要性を説かれて次のように言及されている。

社会福祉は社会生活上の困難を問題にするのであるが、「社会生活の基本的要求を充足するために、個人が社会制度との間にとり結ぶ関係」「個人と社会制度との関係」を社会福祉研究上のテーマとすべきであることを強調されている。

社会福祉の実態にアプローチする場合に「社会関係」の概念を設定することによって、方法論上の問題を明らかに出すことができるかとされている。つまり社会福祉は「病理学的社会現象——いわゆる貧困・病氣・不潔・失業——をそれ自体として (as such) でなく、社会関係という視点、あるいは関係枠 (frame of reference) によって考え、その解決を計ろうとする」ものであるとされている。<sup>③④</sup>

上記より、社会福祉の中核概念は、「社会関係」という「関係枠」に置かれたのであるが、それでは、「社会関係」

とは端的にいつて、何を意味するのであるうか。

竹内愛二氏はこれに関して「社会関係とは役割関係に他ならない」<sup>39)</sup>と断言されている。そこで役割概念を次節において概観してみることにする。

## 第一節 役割概念

理論的には、「相互作用状況における個人によって遂行される学習された行為の、又は、所為 (deed) の類型化された連続であり、個人の行為の組織化は、人 A が人 B を観察する際の知覚的あるいは認知的行動の所産である」(Theodore. R. Sarbin) といわれている。組織化された個人の行為に対する、認知的行動は、相互作用状況下で類型化された個人の行為に基いてなされるものである。従って、類型化された他者の行為の認知と期待に基いて自己もまた類型化された反応、行為をなす。更に、自己の行為が他者に反映する、これが役割の原理となるものとされる。

はなはだ抽象的な定義であるが、このような認知的ないし知覚的レベルにおける役割概念の把握の仕方について、もっと、端的に役割を「行動様式」であると定義づけたものに T・M・ニューカム (T.M. Newcomb) がいる。彼によると役割と地位は不可分であつて、一定の地位には必ず一定の役割がともない、役割には集団や社会において一定の地位が附帯しているものである。この役割と地位に関する概念は、未だ統一的な定説がなく、その意味、解釈も相当多岐にわたっていると云われる。この役割概念の問題に接近する方法として二つのタイプに分けて考察してみる。

第一のタイプは前述したサービン (Theodore R. Sarbin) の理論的立場を更に明確化したものとして、あらゆる社会福祉方法技術の理論化 (その一)

人間関係ないし社会集団で両親や兄弟関係において、あるいは遊戯、学校集団等におけるすべての相互作用の場面で通じて、行動型を学んでいくものである。すなわち行動の型を学んでいく学習の過程は「相互作用における他者の行動の文脈のなかにおかれること」で学習され、その学説の根拠には社会的自我の発生学的な形成過程の段階説に支えられている。

次に第二のタイプであるが、このタイプに属するものとしては、ニューカムの学説が上げられる。つまり、ある社会集団の中で占めている個人の「地位」ないし「位置」が前面におし出され、その「地位」ないし「位置」に附帯したものとして、役割を説明概念として用いている。この場合の役割についての考え方は、「地位の動的側面であるとして説明される。たとえば、母と子供、教師と生徒といったような相互作用場面を考ええると、彼らを場所的に位置づけている一定の地位のあいだの関係として考えられる」として、型の固定された一般的、非人格的な面として、構造的側面よりとらえた社会学的接近である。これに対して第一のタイプの相互作用の過程に即した動的なものとして、自我の側面からとらえた社会心理学的接近である。役割概念をこのように二つの方向よりとらえる方法は、竹内愛二氏の所説にもみられる。即ち前述したように、氏は社会福祉の視点を社会関係という枠をもってとらえようとされ、その社会関係を役割関係と規定され、その上、役割のセットを大別して、一つを「集団志向的役割 (group-oriented roles)」と上げ、他を「制度志向的役割 (institution-oriented roles)」に二分されている。前者に匹敵するものが、役割概念の第一タイプであり、後者に適合するものが第二のタイプである。このように役割概念を二分して究めた意図は、福祉と構造主義の接点が後述するように関係概念によって支えられて、それによって全体性の原理が掘下げられることにあつたからである。そしてこの関係概念を明確化する方法として、あらゆる関係概念の基底をなす相互作用関係に論理的根拠を求めるためには以上の二分法は好都合な方法であると考えられ

る。なぜなら、相互作用関係は役割概念が基体となって結ばれる相互交渉である。すなわち竹内氏の言を借りれば、制度志向的な役割が基体となって「制度的社会関係」が形成され、「集団志向的役割」によって「集団志向的関係」が対応して社会生活が営まれるからである。かくして社会関係には制度的社会関係と集団志向的関係との二つの関係構造が明らかにされたのである。さらに福祉にもちこまれた役割概念の効用については、サンフォード、N、シャーマン (Sanford, N. Sherman) は、ゴンバーグ (Gonberg) のケースワーク理論における適用効果の評価として次のように述べている。(1)社会的役割適応が構成概念として提出されている。(2)行動を具体化する情動的、生物学的、社会的そして文化的な力の個々の知覚が統合されうる。(3)系統的な秩序により、個人の多面性や家族の多様性の理解がもたらされる。(4)家族や個人の悩みが評価され、かつ処遇される。<sup>④</sup>すなわち役割概念は個人及び集団の体系により具体性を与えるものであり、個人及び集団の統一的核を提供するものである。そもそもソーシャルワークにおける役割概念の価値は、ベーム (Werner, Boehm) も指摘するように「それが社会的機能の冒された範囲を確認させる」<sup>④</sup>ことにある。社会的機能とはベームによれば諸役割の総称である。役割はこのようにソーシャルワークの焦点を明らかにする目安となるのであるが、人が合理的に相互に矛盾のない社会的機能を営むには、役割のものが要求条件と主体的条件の一致ないし調和が要求される。ここで言われる主体的条件とは単に個人の知識や能力や動機といったものではなく役割のもつ集団志向的傾性を指すのである。すなわち、役割が個人に要求する制度志向的な傾性と、個人によって果される集団志向的な傾性とが、一致ないし調和しているとき、人は適応状態を維持していると言われる。

ソーシャルワークは役割のもつ「位置」あるいは「位座」を問題にするのではない。まして、個人の知能や能力、動機を問題にするのでは決していない。役割のもつ二つの特性に着目して、役割実行の原因と結果を探究するのである。

ひるがえって考えてみると、人の社会生活は、もっと複雑で多様である。役割も一人の人間が一つの役割だけを遂行しているということは実際にはありえない。多様な役割関係、ないし社会関係を維持して生活はなり立っている。そこで次節で社会関係の重複性について述べてみたい。

## 第二節 社会福祉における関係論

人は多様な社会関係という網にとりかこまれ、その網の中で生活機能を果している。つまり、個人が関わる社会関係は「複数」の関係 (social relations) であって、単一の社会関係では決していない。岡村重夫氏の言説を借りて説明すれば、「個人とある特定の制度との社会関係 (単数) をのみとりあげていうのは、社会福祉の立場ではない。それは医療とか、教育とか、社会保障制度とか、一連の専門分業的制度の立場、社会関係の全体ということ」<sup>④</sup>「個人が一つの役割の実行をする場合でも、彼のもつ複数の社会関係全体というものに規定されて行なわれるもの」である<sup>④</sup>とされる。さらに社会福祉の固有の視点が社会関係の主體的側面に存在するのであるが、氏の所論は、「個人の全体と社会制度全体との関係の全体」に象徴されている「全体性の原理」に福祉の対象の固有性と援助の特色を規定されている。このことは、第一章第二節の全体と部分においても触れたように少し重複するようだが、社会福祉の一元的な意味を問うなら、この部分にこそ重点をおいて考えねばならない。個人それ自体が問題になるのではなく、いわんや制度そのものが問題になるのではない。まして福祉の援助の質が性格分析にはじまって精神療法、精神分析のみに墮しては、福祉の固有の意味を抹殺するのに等しい。かたや制度論者のように、個人の生活次元から遊離して、制度政策の問題点に力点が置かれるのも、福祉の現実性よりみて意味をなさない。なぜなら、福祉は、「生活上の困難にかかわり」「生活問題の援助は現実可能なものでなければならない」からである。福祉の視点が「個人の

全体と社会制度全体との関係の全体」に置かれる以上、福祉の意味は「関係の全体」そのものに一義性が存在する。このことはソーシャルワーク関係においてもしかりである。前述の制度との「関係の全体」論を前節で整理した観方をもって制度志向的全体論とすれば、ソーシャルワーク関係における全体論はむしろ集団志向的な全体論に加重されて説明されよう。つまり、ソーシャルワークの面接場面を例にとれば、ソーシャルワーカーと対象者との二人の人間が面談するとき、それぞれのパーソナリティー間で力動的な相互関係が成立する。その関係は相互的な好感的感情が存在するような生産的、積極的な関係から否定的な関係に至るまであらゆる質の関係が存在する。これらの関係からなかが生まれる。関係の生み出す副産物がわれわれに多大の関心と呼ぶものであるが、もっともこの二者の関係はソーシャルワークにおける専門職業的な関係に限定されたものであり、対象者をして変化への誘引となるような副産物でなければならぬ。そのためにはソーシャルワーク関係は、対象者との関係を成立発展させる素材となるべきものとして、その人の態度、感情的傾向、行動型式、他人に対する配慮の仕方を明らかにして、もっと「そうした素材と現実の対象者の行動に照応させて」始めて動くソーシャルワークが可能であるといわれる。つまり、対象者の内的傾向と現実の問題との関係、すなわち心理的、感情的特性が現実の社会生活を営む上で、いかなる障害になっているか。あるいはまた生活上の問題がいかなる型で感情及び心理面に影響を与え、不満や葛藤を起しているか、というところに、ソーシャルワークの全体性の概念が生かされる。ホリスはこのことをソーシャルワークの定義において明確に述べている。「ケースワークは逆機能 (dysfunctioning) の内的、精神的原因と、外的、社会的原因の両面を認識し、個人が社会関係の中で、自己の要求 (needs) をより完全に満足させ、いっそう適切に機能することができるよう援助すること」<sup>47</sup>にある。このようにソーシャルワークにおける問題は、人間と状況を有機的に関連させて、心理社会的に全体視野から接近されなければ、ソーシャルワークの効果は期待され

ないのである。

以上ソーシャルワーク関係は、個人の側に視点がより多く移され、心理面に加重される可能性があるが、役割の二面的性質を含んだ全体的視野の上に立って対象者を処遇するのが好ましい。

それではソーシャルワークの最終の目標は何であろうか。今までこの目標ないし目的について触れてこなかった。スウィザン、パワーズ (Swihan Bowers) は「ソーシャルケースワークの本質と定義」<sup>④</sup>において、一九一五年から一九四七年代までの約三四種類の定義を論理的に分析した上で、その結論として、次のような二つの一般的な目的を見出している。その目的は、(1)個人の社会関係における、よりよい適応と、(2)個人のパーソナリティの発展にあるとしている。しかし(2)は本論の脈略から捨象される論理的必然性が認められ、(1)に焦点をあてて論開いていきたい。

かくて、ソーシャルワークの目的たる「適応」の概念についてふれることになるが、紙数の制限もあり別誌にゆずりたい。

構造主義の概念を社会福祉の理論に適用しようとしたのは、社会福祉の本質や方法を明らかにし、論理構成するためであった。また既存の方法論の知識を組織化して社会福祉理論を拡大し、補強する意図からでもあった。そのために主として岡村重夫氏の社会福祉論を中心として、社会福祉の視点を再認識することになったが、本論では人間生活の営まれる現実状況から遊離し、抽象をのべるものとなった。しかし、社会福祉の共通概念は「状況における人間」という二元的相互関係を問題とするものであり、その概念のもつ「多面性と多機能性」によるところに福祉的認識を与えられたことは益とすべきことである。

なお、行動主義的知見による「状況における人間」の相互依存関係のもたらす成長への行動と態度の変容メカニ



ズムや適応の概念規定を別の機会に概観する必要がある。主に本論においては理論的系譜を中心に追究してみた。

# 【引用文献】

- ① 社会福祉研究第一九号 鉄道弘済会 一九七六 四一頁
- ② 同右書 四六頁
- ③ J・ピアジェ著、滝永武久・佐々木明共訳、構造主義（東京・白水社 昭四五）一六頁
- ④ 同右書 一八頁
- ⑤ 同右書 二〇頁
- ⑥ 同右書 二二頁
- ⑦ 波多野完治、ピアジェの児童心理学（東京・国土社）一七頁
- ⑧ 富永健一、「役割と地位」兼子宙編、人間関係の心理（東京・中山書店 昭三三）五五頁
- ⑨ 同右書 五六頁
- ⑩ 山根常男「家族力動論の理論的背景」現代社会学の基本問題（東京・有斐閣 昭四三）所収一九六頁
- ⑪ 同右書 一九七頁
- ⑫ F・ホリス著黒川昭登・本出祐之・森野郁子訳、ケースワーク（東京・岩崎学術出版社一九六六）一八頁
- ⑬ ヘレン・H・パールマン著、松本武子訳「役割概念とソーシャルケースワーク」松本武子編、ケースワークの基礎（東京・誠信書房、昭和四二）所収 一四三頁
- ⑭ G・ハミルトン著、三浦賜郎訳、ケースワークの理論と実際（東京・有斐閣 昭三八）二頁
- ⑮ H・H・アブラッカー著黒川昭登訳、ケースワーク入門（東京・岩崎学術出版社一九六八）一一頁
- ⑯ 同右書 一六一頁
- ⑰ 波多野完治右掲書 二〇頁
- ⑱ J・ピアジン著 右掲書 一六頁
- ⑲ 福武直編社会学「個人社会」（東京・東京大学出版会 一九五八）七二頁

- 20 同右書 二八頁
- 21 藏内数太、社会学（東京・培風館 昭三七）一四三頁
- 22 福武直 右掲書
- 23 万成博「C・H・クレーリ、G・H・ミード、T・M・ニューカレ」ソシオロジ 第五卷第四号
- 24 同右論文
- 25 同右論文
- 26 塩原逸編、社会学の基礎知識（東京・有斐閣 昭四四）二九八頁
- 27 万成博 右掲論文
- 28 岡部慶三、社会的行動（東京・培風館 昭四四）四七頁
- 29 竹内愛二、実践福祉社会学（東京弘文堂）二二頁
- 30 岡部慶三 右掲書 二二頁
- 31 新睦人 現代社会の構造（京都・汐文社 昭四二）一三二頁
- 32 同右書
- 33 作田啓一「大衆社会の構造」山根常男、森岡清美編、現在社会学の基本問題（東京・有斐閣 昭四三）四頁
- 34 T・P・Spiegel "the Resolution of Rore conflict within the Family" Bell and Vogel itroduction to the Family p. 361
- 35 D・カッツ著武政太郎浅見千鶴子訳ゲタルト心理学（東京・新書館一九六二）一一三頁
- 36 岡村重夫、社会福祉学（総論）（東京・柴田書店昭四三）一二〇～一二二頁
- 37 同右書 一二〇頁
- 38 竹内愛二 右掲書 一〇頁
- 39 同右書 一九頁
- 40 富永健一「役割と地位」兼子宙編、現代社会心理学（東京・中山書店昭三三）五四頁
- 41 同右論文 五五頁
- 42 竹内愛二 右掲書

- ④③ S・N・シャーマン著「ケースワークの理論における家族の本理念」松本武子編「ケースワークの基礎」四二頁
- ④④ 同右書 一五四頁
- ④⑤ 同村重夫 「社会福祉方法論の体系化をめざして」(精神医学ソーシャルワーク) 一九六八年第三卷二七頁
- ④⑥ 柏木昭 ケース入門(東京・川島書房 昭四二) 一九頁
- ④⑦ F・ホリス著、黒川他 右掲書 七頁
- ④⑧ S・バーワース「ソーシャルケースワークの本質」松本武子編、右掲書 四〇頁